

# イタリヤ人

寺田寅彦

青空文庫



今日 七軒町 まで用達しに出掛けた帰りに久し振りで根津の 藍染町 を通った。親

友の黒田が先年まで下宿していた荒物屋の前を通った時、二階の欄干に青い汚れた毛布が干してあって、障子の少し開いた中に皺くちやに吊した袴が見えていた。なんだかなつかしいような気がした。黒田が此処に居たのはまだ学校に居た頃からで、自分はほとんど毎日のように入りましたから主婦とも古い馴染みではあるが、黒田が居なくなつてからは妙に疎くなつてしまつて、今日も店に人の居なかつたのを却つて仕合せに声もかけずに通り過ぎた。しかしこの家の二階は何となくなつかしい、昔の香がする。二階と言つて別に眺望が佳いのもなければ、座敷が綺麗だという訳でもない。前にはコケラ茸や、古い瓦屋根に草の茂つた貸長屋が不規則に並んで、その向うには洗濯屋の物干が美しい日の眼界を遮る。右の方に少しばかり空地があつて、その真上に向ヶ岡の寄宿舎が聳えて見える。春の頃など夕日が本郷台に沈んで赤い空にこの高い建物が紫色に浮き出して見える時などは、これが一つの眺めになつたくらいのものである。しかし間近く上野をひかえているだけに、何処か明るい花やかなどころもあつた。花の時分などになると何となく春のどよみが森の空に聞えて窓の下を美しい人の群が通る事もあつた。欄干にもたれて何かしんみりした話

でもしている時、程近い時の鐘が重々しいなりを伝え伝えて遠くに消えることもあった。いったい黒田は子供の時分から逆境に育つてずいぶん苦しい思いをして来た男だけに世間に対する考えもふけていて、深い眼の底から世の中を横に睨んだようなところがあつた。観察の鋭いそしていつも物の暗面を見たがる癖があるので、人からはむしろ憚かられていたためか、平生親しく往来する友も少なかった。そのひねくれたようなところが妙に自分と気が合つたのも不思議である。自分はどうかこうか世間並の坊ちゃんで成人し、黒田のような苦勞の味をなめた事もない。黒田の昔話を小説のような気で聞いていた。月々郷里から学資を貰つて金の心配もなし、この上気楽な境遇はなかつた筈であるが、若い心には気楽無事だけでは物足りなかつた。きまりきつた日々の課業をして暇な時間を無意味に過すと云うような事がむしろ堪え難い苦痛であつた。ただ何かしら絶えず刺戟が欲しい。快楽とか苦痛とか名の付くようなものでなく、何んだか分らぬ目的物を遠い霞の奥に望んで、それをつかまえよう／＼としていた。小説を読んだり白馬会はくばかいを見に行つたりまた音楽会を聞きに行つたりしているうちには求めている物に近づいたような気がする事もあつたが、つい眼の前の物に手の届かぬような悶もどかしい感じが残るばかりである。こんな事を話すと黒田はいつも快く笑つて「青春の贅沢」は出来る時にしておくさと言つた。半日も下宿に

籠つて見厭きた室内、見厭きた庭を見ていると堪えられなくなって飛び出す。黒田を誘うて当もなく歩く。咲く花に人の集まる処を廻ったり殊ことごと更に淋しい墓場などを尋ね歩いたりする。黒田はこれを「浮世の匂」をかいで歩くのだと言っていた。一緒に歩いてみると、見る物聞く物黒田が例の奇警な観察を下すのでつまらぬ物が生きて来る。途上の人は大きな小説中の人物になつて路傍の石塊いしころにも意味が出来る。君は文学者になつたらいいだろうと自分は言つた事もあるが、黒田は医科をやつていた。

あの頃よく話の種になつたイタリア人がある。名をジュセツポ・ルツサナとかいって、黒田の宿の裏手に小さな家を借りて何処かの語学校とかへ通つていた。細君さいくんは日本人で子供が二人、末のはまだほんの赤ん坊であつた。下女も置かずに、質素と云うよりはむしろ極めて賤しい暮しをしていた。日本へ来てゐる外国人には珍しい下等な暮しをしていたが、しかし月給はかなり沢山に取つてゐるといふ噂であつた。日本へ来てゐるのは金をこしらえるためだから、なんでも出来るだけ儉約するのですと彼自身人に話したそうである。黒田の居た二階の縁側に立つて見ると、裏の塀越しにイタリア人の家の庭から縁側が見下ろされる。二間けんあるかなしの庭に、植木といつたら柘榴ざくろか何かの見すばらしいのが一株塀の陰にあるばかりで、草花の鉢一つさえない。今頃なら霜解けを踏み荒した土に紙屑や

布片などが浅猿あさましく散らばりへばりついている。晴れた日には庭一面におしめやシャツのような物を干す、軒下には缶詰の殻やら横緒の切れた泥塗どろまみれの女下駄などがころがっている。雨の日には縁側に乳母車があがって、古下駄が雨垂れに濡れている。家の中までは見えぬがきたなさは想像が出来る。細君からして随分こんな事には無頓着な人だと見える。どうせあんな異人さんのおかみさんになるくらいの人だからと下宿の主婦は説明していた。しかし細君はごく大人しい好人物だということで近所の気受けはあまり悪い方ではなかつたらしい。

主人のジュセツポの事を近所ではジューちゃんと呼んでいた。出入りの八百屋が言い出してからみんなジューちゃんというようになったそうである。自分は折々往来で自転車に乗って行くのを見かけた事がある。大きなからだを猫背に曲げて陰気な顔をしていつでも非常に急いでいる。眉の間に深い皺をよせ、血眼ちまなこになって行手を見つめて駆けている。さまは餓えた熊鷹が小雀を追うようだと黒田が評した事がある。休日などにはよく縁側の日向ひなたで赤ん坊をすかしている。上衣を脱いでシャツばかりの胸に子供をシツカリ抱いて、おかしな声を出しながら狭い縁側を何遍でも行ったり来たりする。そんな時でも恐ろしく真面目で沈鬱で一心不乱になっているように見える。こちらの二階で話し声がしていても

少しも目もくれず、根気よく同じような声を出して子供をゆすぶっている。しかし子供が可愛くてならぬという風でもない。ただ一心に何事かに凝り固まって世間の風が何処を吹くのも知る余裕がないといったようである。自分はこんな場合を見かけるとなんだか可笑しくもありまた気の毒な気がした。黒田はあれはこの世界に金を溜める以外何物もない憐れな男だと言っていた。五厘りんだけ安いというので石油の缶を自転車にぶらさげ、下谷したやの方まで買いに出かけるといふ事であつた。八百屋などが来ると自分で台所へ出かけてやかましく値切り小切りをする。大根を歯で喰い欠いてみてこれはいけないと云つて突返したりする。煮焚きの事でも細君にはやらせないで独りで台所で何かガチャつかせながらやっていた。

花を尋ねたり、墓を訪うたり、美しい夢ばかり見ていたあの頃の自分には、このイタリア人は暗い黄泉の闇に荒金を掘っている亡者もうじゃか何かのように思われた。とにかく一種侮蔑の念を抑える訳に行かなかつた。日露戦争の時分には何でもロシアの方に同情して日本の連捷れんしょうを呪うような口吻こうぶんがあつたとかであるいは露探ろたんじやないかという噂も立つた。こんな事でひどく近所中の感じを悪くしたそうだが、細君の好人物と子供の可愛らしいのとで幾分か融和していたらしい。子供は髪が黒くて色が白くて美しい。上の男の子はあの

頃四つくらいで名はエンリコとかいうそうだが、当り前の和服を着て近所の子供と遊んでいるのを見ては混血児と思われぬようであった。黒田はこの児を大変に可愛がってエンチヤン／＼と親しんでいた。父親が金をこしらえあげた暁にこの児の運命はどうなるだろうかと話し合つた事もある。

ジュセツポの家で時ならぬ嵐が起つて隣家の耳をそばだてさせる事も珍しくない。アクセントのおかしいイタリア人の声が次第に高くなる。そんな時は細君のことをアナタが／＼と云う声が特別に耳立つて聞える。嵐が絶頂になつて、おしまいに細君のすす噺り泣きが聞え出すと急に黙つてしまう。そして赤ん坊を抱いて下駄ばきで庭へ出る。憤怒、悲哀、痛苦を一まとめにしたような顔を曇らせて、不安らしく庭をあちこち歩き廻るのである。異郷の空に語る者もない淋しさ佗しさから気まぐれにこしかつ拵えた家庭に憂き雲が立つて心が騒ぐのだろう。こんな時にはかたくななジュセツポの心も、海を越えて遙かなイタリアの彼方、オレンジの花咲く野に通うてきりよ羈旅の思いが動くのだらうと思ひやつた事もある。細君は珍しいおとなしい女で、口くちやか喧ましい夫にかしづく様はむしろ人の同情をひくくらいで、ついで近所なぞで愚痴をこぼした事もない。従つてこの変つた家庭の成立についても細君の元の身分についても、何事も確かな事は聞かれなかつた。今は黒田も地方へ行つてしまつて



イタリア人の話をする機会も絶えた。

こんな事を色々思い出して帰つて来ると宅のきたないのが今更のように目に付く。よごれた畳破れた建具を見まわしていたが、急に思いついて端書はがきを書いた、久し振りでは黒田にこんな事を書いてやった。

……東京は雪がふつた。千駄木せんだぎの泥濘はまだ乾かぬ。これが乾くと西風が砂を捲く。

この泥に重い靴を引きずり、この西風に逆らうだけでも頬が落ちて眼が血走る。東京はせちがらい。君は田舎が退屈だと言つて来た。この頃は定めてますます肥つたらう。僕は毎日同じ帽子同じ洋服で同じ事をやりに出て同じ刻限に家に帰つて食つて寝る。

「青春の贅沢」はもう止した。「浮世の匂」をかぐ暇もない。障子は風がもり、畳は毛立っている。霜柱にあれた庭を飾るものは子供の襁褓むつきくらいなものだ。この頃の僕は何だかだんだんに変つて来る。美しい物の影が次第に心から消えて行く。金がほしくなる。かつて二階から見下ろしたジュセツポにいつの間にか似てくるようだ。墮落か、向上か。どちらか分らない。三月十四日

ペンで細字で考え考え書いてしまったのを懐にして表のポストに入れに出た。そして今書いた事を心でもう一遍繰り返し返しながら、これを読んだ時に黒田の苦い顔に浮ぶべき微笑

を胸に描いた。

(明治四十一年四月『ホトトギス』)

# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

初出：「ホトトギス 第十一巻第七号」

1908（明治41）年4月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「伊太利人」です。

※初出時の署名は「藪柑子」です。

入力：Nana ohbe

校正：川向直樹

2004年6月16日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# イタリ了人

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>